
邂逅

はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
邂逅

【Nコード】
N4956A

【作者名】
はるか

【あらすじ】
ある日商店街のくじ引きで豪華客船の招待券を当てたコナン達。また時を同じくして青子、快斗も招待券を当てていた。そして出会う探偵と怪盗。客船で起こる殺人事件。その第一容疑者は……。コナンと快斗の出会い編。ノーマルCPダチ物です。

開幕：Side C

「え、豪華客船で桜庭島にご案内？」

米花街5丁目毛利探偵事務所。

8月の暑い熱帯夜、

エアコンのきいたりリビングで夕食をパクつきながら出たその話題に、コナンはきよんと首を傾けた。

それに対し話題を出した当人である蘭はにこやかに続ける。

「ええ、そうなのよ。」

商店街の福引きをやったらなんだか当たっちゃってね。」

ハハ・・・コイツ、こーゆーときの運だけはいいいからな・・・

「せっかくだから、私とお父さんとコナン君で行こうかな、と思つて。」

「うんっ！ボクはいいよ、楽しみだねっ！」

「・・・ま、いいけどよ。」

内心想ったことはおくびにも出さず、

コナンは『子供』を装って無邪気に答えた。

小五郎の方も仏頂面ながらも了承する。

「それで、その旅行ってのはいつからいつまでなんだよ？」

「それがね凄くて！なんと、8月13日から5泊6日なのよ！」

「へっ。長いんだねー。」

「ええ。だからちゃんと用意しておいてね。

でね、その客船、ネレウス号、っていうんだけど、

3階まである豪華客船なの。

中心には大きなパーティ会場兼食堂があって、

各部屋もホテルみたいになってるみたい。」

「へえ。そりゃあスゲえな。一体福引き何等だったんだ？」

「それがね、なんと、特賞だったの！」

全部で5600球もあるなかで、たった2個しかないのよ！

お店の人はこのキャンペーン中にまさか出るとは思わなかった、って言ってたわ！」

「あーそれで……。」

「なるほど……。」

「それでね、福引きで当たった私たちは、

特別に招待された有名人さん達と一緒に船に乗るのよ！

噂ではあの女優、有家雅美もいるそうよ！」

あまりの運の良さに半ば呆れる二人を尻目に、

蘭は食事を終えた皆の食器を持ってさっさと立ち上がると、

「それじゃ早く用意してよねー♪」

と、今にも鼻歌が聞こえてきそうな勢いで台所へ入っていった。

後に残されたのは少し呆然としたコナンと小五郎。

「蘭の奴・・・前々から運がいいとは思っていたが・・・良すぎるんじゃないか？」

うなる小五郎に、コナンは一も二もなく頷いた。

開幕：Side K

「へえ。ちなみに聞くけど、どんぐらいの確率で？」

「うーんと、確か5600個の中で2つ・・・だったかな。」

おじさん驚いてたよ。キャンペーン中にまさか出るとは思ってなかった特賞が、

両方とも出るとは、って。それになんだかその人と私、そっくりな顔をしてる見たい。

双子なのか？って聞かれたよ。」

「つーことは、もう一人、

青子そっくりの、豪華客船を当てるよー運のいい奴がいるって事か？」

「そうみたい。」

少なからず驚いて言う快斗に、青子はあっさりと肯定してのけた。

「名前とか、聞いたのか？」

「うん。青子もちよつとびっくりしちゃってね。」

そしたら・・・えーと・・・なんて言ってたかなあ・・・。」

「覚えてねえのかよ。」

「そ、そんなことないもん！忘れちゃっただけだもん！」

呆れた快斗に、青子は必死に弁明してみる。

「えと・・・うーん・・・確か、なんだかお花の名前だったと思う。」

「花だあ？ってことは女か？」

「うん。かわいらしい名前だったよ。」

えーっと・・・ら・・・らん！そうそう、蘭っていう名前の人！」

「・・・へ・・・？」

なんだか聞いたことがある名前に快斗は驚いた。

って、それってあのチビになってる名探偵の想い人の名前じゃなかったか・・・？

同名かも、と思いつつ、しかし青子そっくり、という特徴にあてはまり、なおかつ「蘭」という名前となれば、彼女しか思い浮かばない。

「なあ・・・、聞くけどよ、

その子の苗字、毛利、とかいうんじゃねーだろーな？」

「え？そうそう、そんなのだったっ！

よく分かったね、快斗！もしかして知り合い？」

「いや・・・えっと・・・そのだな、

あの名探偵、眠りの小五郎の娘が蘭っつー名前だってことをどっかで聞いたんだよ。

そんでもって米花街の商店街だろ？その福引きやってたところとなりゃ、だいたい見当はつくだろ。」

「へー、そっかぁ！よく知ってるんだねー快斗！」

「当然だろっ。」

屁理屈を並べ立てる快斗に素直に感心する青子。

ふーっ、青子が単純で助かったぜ・・・。

とか思ったりしたのはむろん心の中に留めておく。

「えっと、んで、その豪華客船がどうしたんだ？」

話を軌道修正した快斗にポンツと青子は手を打って、うれしそうに続けた。

「あ、そうそうそうだった！

でね、その豪華客船、8月13日から5泊6日なんだけど、快斗も一緒に行かない？」

「へ？」

思わず惚けた声を出す。

「な、なんで俺と？」

いや嬉しい。

ほかの誰でもなく自分を誘ってくれたことは確かに嬉しいのだが、理由がわからない。

幼なじみだからだろうか？

友人、というのなら恵子でもいいはず。

ということは、もしかして・・・？

淡い淡ーい期待を胸に抱きつつも、

驚いた声を装って聞き返す。

それに対し、青子は幾分沈んだ顔で、

「だって、お父さんお仕事なんだもん・・・。

お父さんに言ったら、

それじゃあ快斗君と言ったらどうだい？って言われて・・・。」

あ。なるほど。

つまり最初は父親で、だめだったから気心知れた俺に白羽の矢が立

ったと。

仕方がないこととは知りつつも微妙に面白くない快斗だが、
ここで不機嫌をあらわにして、
せっかくの青子からの旅行のお誘いをなしにするわけにはいかない。

それに、『あの』毛利蘭が行くのだ。

となれば、金魚の糞のように「あいつ」がついてくることは間違い
なしっ！

こんな機会見逃せるかよっ！！

———そういうわけで。

「しっかたねーな！。

お子様の青子ちゃんは一人でいくのが心細いらしいから、
俺がついて行ってやるよっ！！」

ぶっきらぼうに言い放つ。

はっきりいって通常の人ならあ、そ、それならいい。とでも言いそ
うな科白だが、
そこは幼なじみ。

天の邪鬼な言葉をほとんど省いて了承の言葉だけを抜き取ることが
できた青子は、
にこにここと、

「それじゃあその日の9時に港から出航だから、
8時に時計台の前にいてくれる？」

「おう。」

そんなこんなで話はうまくまとまった。

探偵と怪盗、二人の運命が重なる。

客船：Side C

8月13日月曜日。Am 8：20。
米花埠頭。

「うわー、でっけえもんだ。」

「本当に大きいねー、コナン君。」

「うん。凄いね・・・。」

それぞれ感嘆の声を上げながら。
3人はネレウス号に乗り込んでいった。

中にはいると、一面に紅い絨毯が敷き詰められ、
天井には小型ながらも豪華なシャンデリアが天井に固定されている。
はつきり言って、船の中だとは思えないような装飾だ。
壁になんだか絵画まで飾ってあったりする。

「うわぁ。中身も凄いんだね！」

「本当に豪華だねー。」

「・・・ったくこれだから金持ちはやー。」

「お父さんっ！」

年中貧乏人間の小五郎がけっ、とでも言いそうな雰囲気言い放ち、
さっそく蘭にたしなめられる。

「それにしても、凄いな。揺れたりしないのかな？」
「それは大丈夫だと思うよ。」

少し不安げに呟いた蘭に、コナンは明るく、

「だって見てみてよ。」

シャンデリアとか、全部天井に固定してあるでしょ？
絵も壁に4隅で貼り付けてるみたいだし……。
これって、揺れても落ちてこないようにだと思っようよ。」

「あ、そういえばそうね……。」

ほっとしたような笑みを浮かべる蘭に、
自然とコナンの口も満面の笑みをかたどった。

「失礼しますが、毛利様でいらっしゃいますね。」

「あ、はいそうです。」

そんなこんなしているうちに近づいてきたボーイに荷物を渡し、
3人はその人について客室へと案内されていった。

「ネレウス号は、10万重量もの大型客船です。
中央に吹き抜けの会場があり、その周りに客室が広がっています。
客室は3階まであり、各部屋にお手洗いとバスルームがついており
ます。」

にこやかな顔で語られる船の説明をつらつらと聞き流しながら進んでいるうちに、
どうやら泊まる部屋についたらしい。
ボーイが足を止める。

「ここがお客様のお部屋、103号室でございます。
ご用の際は、中にある電話でご連絡下さい。
ちなみに、フロントは100番です。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

頭を下げたボーイに一礼すると、
3人は客室へと入っていった。

「うわあ。」

「・・・わあ。」

「うへ。」

部屋を一目見て。

蘭、コナン、小五郎はそれぞれあっけにとられた声を出した。

「・・・あー、なんつか、無駄な豪華さだな・・・。
むしろ居心地が悪くなるぜ・・・。」

眉をひそめる小五郎に声もなく首をこくこくと縦に振るコナン。

「うわあっ。どこかのお城のお姫様の部屋みたいじゃない！
凄く豪華だし、飾り付けなんかも本っ当に可愛い！」

そんな2人とは対称的にはしゃぐ蘭。

・・・つまりは、そーゆーことなのである。

床一面の紅い絨毯は当然、

細かい細工の施された調具品、なんだか豪華な電灯、
絹と思われる上質な布を何枚も使ってあるキングサイズのベッドが
3つ。

あまりの豪華さ故に、

なんだか場違いな気がしてくつろぐどころか、居心地が凄く悪い。

「5泊6日もここで過ごすのか・・・？」

・・・安眠できそーにねーな・・・。」

「同感・・・。」

はしゃぎ回る蘭を尻目に、

力なく呟いた小五郎に、珍しいことにコナンもまた力なく同意した。

客船：Side K

同月同日。AM 8：30。
同所。

「うひょー。でっけえなあ！」

「快斗っ！あんまり大きな声で騒がないでよ、周りの人が見てるでしょ！？」

「ていっても、こんだけのデカさみれば驚くのがふつーだろーが。」

「そ、それはそうだけどっ！」

「・・・それにしても、本当に大きいよねー。こんなでちゃんと浮くのかなあ？」

「浮かなきゃ船じゃねーだろ。」

「確かにそうだけど・・・。」

「ま、こんなところでぐだぐだ話してねーで、さっさといこうぜ！」

「あ、ちよつと待ってよ、快斗ー！」

自分の荷物を担いで歩き出す快斗を青子が追いかけ、
2人はネレウス号へと入っていった。

「うわあ。凄い！凄いよ快斗！」

「ああ、ああ。見りゃわかるって。」

感嘆の声を上げる青子の言葉を聞き流しながら、
快斗はつい癖で辺りを注意深くチェックしてしまい、
そんな自分に苦笑した。

ボーイが近づいてきて、
おそらく定型句であろう口上を始める。
なんでも、10万重量もだとか。

まったく、ネレウス号ねえ。

——ネレウス。

ギリシャ神話の海神で、ポントスとガイアの息子。海の精霊、ネレ
イデスらの父。

——そして、あらゆる秘密を知る海の賢者

先日、この旅行が決まってから紅子に言われたことがふと浮かぶ。

『命の母の腕の中、海の賢者に身を委ねし時、汝が秘密、暴かれん・
・。』

『はあ？いきなり何訳わかんねえ事言い出すんだよ、おめーは。』

『黒羽君、この旅行、やめた方がいいわ。』

『へ？』

『さっきの言葉。ルシュファアの予言よ。』

貴方の正体が誰かにバレるって言っているの！やめておきなさい！』

『バーロ、やめろと言われて誰がやめるかよ。』

『貴方、分かってるの！？』

『だーから俺に正体なんかねえって。平気平気。んじゃあな。』

『ちよっとっ！！』

毎度のごとく何故かちよっかい出してくる紅子の予言を訳の分かる
言葉に直してみると、

海の上、ネレウス号の中で俺がキッドだとバレるってことらしい。ったく、よけいな世話だったの。

むしろ面白れーじゃん。誰が俺の秘密を暴くってえのかさ。

「それでは、お客様のお部屋は101号室と102号室になります。ご用の際は、中にある電話でご連絡下さい。ちなみに、フロントは100番ですので。」

「どうもありがとうございます。」

ぺこりと一礼する青子にお辞儀を返して、ボーイは去っていった。

「えっと、快斗、部屋、どっちにする？」

「へ？・・・って何か違うのか？」

「いや、違うないと思うけど・・・。」

「んじゃてきとーでいいじゃねえか。決めづらいつてんなら・・・」

そこで快斗はポンツとどこからともなく一枚のコインを取り出すと、

「それじゃー表だったら俺が101で、裏だったらお前な。」

キンツとはじいて手の甲に乗せる。

「・・・表。」

「それじゃーそーゆーことで。とりあえず荷物運びこもーぜ。」
「うんっ。」

青子が笑顔で頷くのを合図に、2人はそれぞれ自室へと入っていつ

た。

・ ・ ・ むろん、この後青子が歓声を上げるのも、
快斗がげえっ、という声を上げたのも当然のことなのであった。

出会い

ぐうぎゅるるるる・・・

船が出航してしばらく立ってから。

いきなり自己主張した自分のお腹に、コナンは思わず赤くなる。その様子に蘭は苦笑すると、

「そろそろお腹すいたねー。ご飯食べに行こうか？」

「え？ ご飯って自由に食べられるの？」

「うん。そうみたい。セルフサービスらしいから。」

「ふうん。」

納得したコナンの声を聞いて蘭は後ろの小五郎に向かって、

「お父さんはどうする？」

「あー、俺も行く。」

この部屋の居心地の悪さに耐えきれなくなったっていたのか、ぼんやりとした返事とは裏腹にさっさとドアまで歩いていく。

「あ、待ってお父さん。鍵忘れちゃ大変なことになるでしょ？」

「ああ？ 鍵がなかったら閉められねーんじゃないのか？」

「ここ、自動ロックなのよ。」

だから鍵がなくても勝手に閉まるんだけど、入れなくなっちゃうの。

「

「うわ、絶対に忘れないようにしなくちゃね。」

談笑しつつ、3人は食堂への道を歩いていった。

目に入る紅い絨毯。

視線をそらしても、目に入る豪華ベッド。

さらに後ろを向いてみても、目に入る繊細な細工。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「つだああああ！耐えきれねえ！！」

あまりの居心地の悪さに、黒羽快斗、脱落。

キッドの格好をしてキッドをやっているばまだ平気なのだろうが、観客も誰もいない客船の中の自室で確保不能な天才怪盗をやっている面白くない。

むしろ一人で気障なセリフを呟いてる方がしんどいし気味が悪い。

そういうわけで。

快斗は、食事という言い訳に救いを求めた。

ここに来たときのラフなTシャツとジーンズは

楽と言うよりも居心地の悪さを助長するだけなので、

一応持ってきていた出かけ着のシャツとズボンに袖を通す。

つい癖でマジックのタネを先ほどまで着ていた物から移し仕込み直した所で、

そんなことする必要など全くないのだと気がついたが、
またあちこちから仕掛けを出すのも面倒なので、
そのままポケットに鍵を入れ、部屋を出た。

向かう先はもちろん101。
ノックして声をかける。

「おい、青子。腹へらねえか？」
「あ、快斗？」

ガチャ。
とドアが開き、青子が顔を出す。

「俺、腹減ったんだけど。食堂になんか食いに行こうぜ。」
「うん。分かった、ちょっと待ってね。」

パタパタ・・・と一度中に戻り、
すぐにまた出てくる。
どうやら、手荷物のポシェットを取りに行っていたらしい。

「それじゃ、快斗行こうか。確かセルフサービスだったよね。」
「おう。チョコアイスとかあるかな・・・？」
「んもう！子供じゃないんだから！」
「お子様はどちらかな？アホ子。」
「何よ、バ快斗！」

定型句の夫婦漫才を繰り広げながら、二人は食堂へと歩いていった。

「つたく、アホ子の奴、何処いったんだよ・・・。」

豪華客船とはいえ、昼時の食堂の中。

それなりに混んでいる。

そんな中で、快斗ははぐれてしまった幼馴染みを捜していた。

「あ、いた! ——おい!」

見慣れた髪型の上の部分が覚えて、
その手をつかむ。

と、その人物が振り返った。

「——あ。」

「——え?」

きよとん、として自分を見返してきた相手に、
慌てて手をふりほどき、頭を下げる。

「す、すいません、人違いでした。」

一方、蘭の方も酷く驚いていた。

——新・・・?

一瞬、そう思ってしまうほど顔はそっくりで。

でも、纏う雰囲気がどことなく違ったからすぐに別人だと分かった。

「あ、いえいえ。」

慌てて会釈してから、

「お連れの方を探してたんですか？」

「あ、はいそうなんですよ。どうもあいつ方向音痴で。」

へらへらっと笑う快斗を物言いたげにじっと見つめる視線が一つ。

おいおい名探偵、いくら何でも狭量狭すぎだろ、それは・・・。

軽い嫉妬をともなった視線に思わず内心苦笑する。

まあ、本来の姿で、近い目線で話せないから、

それができる同じ年頃の男に嫉妬してしまうのかもしれない。

「おいおめえ、一体蘭に何のようだ？」

後ろからかけられたドスの聞いた声に振り向いてみれば。

「お父さん！そんなんじゃないってば！

この人は、私を、一緒に来た人だと勘違いして話しかけてきただけよ。」

「はんっ、どうだかな。」

鼻を鳴らす小五郎に苦笑する。

「いえ決してナンパとかじゃないんで安心して下さい。」

えっと・・・、毛利小五郎さん、ですよね？」

言った途端ににまゝ、と崩れる顔。

——おい。

「はっはっは、私のことを知っているようだね。」

まったく、有名人は辛いよ、などと呟いている。

「ほらな、蘭。やっぱり分かる人には分かるんだよ。」

ええ、あんたの睡眠時間が、

横にいる坊主（工藤新一）によって大幅に増えてることもね。

などと考えたりもしたがポーカークフェイス。

「なんたって有名な方ですから。」

などと当たり障りのない答を返すと、

「がっはっは。なんだったらサインをあげようか？」

調子に乗ってありがた迷惑なことを言い始める。

やんわりとサインを断り、ふ、と前を見ると蘭の後ろに見えた、今度こそ見知った頭。

快斗は迷わず、声をかけた。

投合

「青子！」

「え？」

快斗の上げた声にこっちを振り返り、
安堵の表情を顔にたたえてパタパタと近づいてくる。
その容姿に快斗の周りにいた3人が驚くのは、予想済み。

「快斗！！ここにいたんだあ！」

「つたく、方向音痴にもほどがあるんじゃないか、アホ子。」

「何よ、バ快斗！」

「あのなあ、なんだってここに入った途端迷えるんだよ。」

「だって人が多いんだもん・・・、って、えっと、この人達は？」

定型句を交わしているうちに3人に気がついた青子が聞いてくる。
その言葉に蘭さんがは、っと我に返り、

「あ、私、毛利蘭と言います。こっちが私の父の毛利小五郎。」

それからこの子は、うちで預かっている江戸川コナン君です。」

「よろしくね！」

ぶっきらぼうな顔の小五郎と違い、
につこりと無邪気な笑顔を青子に向けるコナンは流石に年季が入っ
ているというのか、

それとも母親譲りの演技力か。

違和感を感じさせない笑顔に快斗は一瞬感心した。

「えっと、そーいやまだ名前言ってなかったっけ。俺は黒羽快斗。こっちは幼馴染みの・・・」

「中森青子です。えっと、もしかして、毛利、さんのお父さんって・・・」

改めて自己紹介した快斗の後を青子が引き継ぎ、何やら期待したような目で小五郎を見る。

その様子に蘭は苦笑し、

「蘭でいいわよ。ええ。父、探偵をやってるの。」

「やっぱり！えっと、いつも私のお父さんがお世話になってます！」

小五郎に向かってぺこりと頭を下げる青子に、疑問符を浮かべる皆を見、

「ああ、こいつの父親、中森警部って言って、刑事をやってるんだよ。」

「中森警部って、もしかして、あのK I D係の・・・？」

解説した快斗に、小五郎が驚きを隠せずに言う。

一方蘭は納得した顔で、

「あ、なるほど。あの人の中森、さんのお父さんのね。」

「こっちも青子でいいよ。うん。だから毛利のおじさんもキッド逮捕、がんばってね！」

「え？青子お姉ちゃん、キッド好きじゃないの？」

きよとん、として青子を見上げるコナン。

それはそうだろう。近頃の女の子は、だいたいがキッドのファンだ。

しかし、青子のキッド嫌いを身をもって知っている快斗はただ苦笑するしかない。

「誰が、あんな悪党なんか！キッドなんか大っ嫌いよ！'

必死で追いかけてる青子のお父さんを嘲笑ってる奴なんか、青子、絶対に許さないんだから！」

握り拳を作って力説する青子に、皆ただただ目を丸くする。

変わってる人だな・・・まあ、父親が毎回手玉に取られてちゃ、腹が立つのも当たり前か・・・。

コナンは苦笑して、ふっと青子の隣にいて、キッドの弁護をする快斗を見た。

「まあまあ、あのへボ警部じゃ捕まる訳ねーよ。なんたってキッドは・・・」

「確保不能の大怪盗なんだから、でしょ！？」

ったくもお、快斗ったらマジックが出来るからって、キッドの肩もっちゃって！」

「へえ。黒羽君、マジックができるの？」

「まあね。また後で見せてやるよ。」

肩をすくめる快斗の仕草。

何処かで見たような気がする。

小さな既視感に、コナンは悩んでいた。

その間にも、どんどん話は進んでゆく。

「それじゃあ、ご飯の後みんなで一緒に回ろうか！」

「うん、快斗もね！」

「はいはい。分かったよ。」

「俺はパスだからな。ガキにつきあってられっか。」

言い捨ててさっさとどこかに食べに行く小五郎を蘭はため息をついて見送る。

「お父さん！もう・・・コナン君は、一緒に行くでしょ？」

「・・・」

「コナン君？」

「え、あ、えと、なあに、蘭姉ちゃん？」

思考に沈んでいたコナンは蘭の言葉に反応が遅れ、それに蘭が呆れる。

「まったく。ちゃんと話は聞かなきゃダメよ、コナン君？

あのね、ここでご飯を食べ終わった後、

青子ちゃん達が一緒に船の中見て回らないかって。」

「それなら、もちろんボクも一緒に行くよ！」

「だって、蘭ちゃん。それじゃあ4人で行こうね！」

いつの間にやら名前呼び合う仲になった青子と蘭を内心呆れながら、

子供を装って返事をする。

その様子にポーカーフェイスの後ろで笑いを耐える男が一人。

め・・・めーたんでーっ！

なんつーか、見ててめっちゃくちや違和感あるぞ、お前・・・。
いやまあ確かに凄く面白いんだけどさ・・・

正体を知るものにとっては爆笑したくなるような光景なのだ。

あの名探偵、工藤新一が可愛らしく笑顔で甘える様子など。

っだーっ！！笑わせるんじゃないよ！！

ポーカーフェイス、ちよつとヤバいかも・・・。

ともすれば顔が緩み吹き出しそうになるのを、
食事中懸命に耐える黒羽快斗こと怪盗KIDであった。

違和感

「ここが甲板！広いねー！！」

「ほんとだねー！海が凄く綺麗！」

大きく両手を広げる青子の隣に立って、蘭も歓声を上げる。

そんな二人を後ろで眩しげに見つめる2人組。

コナンこと新一にとって蘭は、いつか帰りたい暖かい場所であり、快斗にとって青子は、闇の中から引きずり出してくれる一筋の光。

彼女たちは、この2人にとって、微妙に意味が違うとはいえ、眩しく、暖かい光であることには違いはなかった。

「ねえ、快斗！」

「なんだよ、青子。」

突然青子が振り向き、話しかけてきたことに一瞬驚くものの、ポーカーフェイスで外には驚きの欠片も出ない。

「さっき、マジックしてくれるって言ったでしょ！？見せてよ、快斗のマジック！」

「本当？私も見てみたい！」

期待に目を輝かせる少女達と、冷静に自分を見るコナンの視線を感じ取って快斗は内心苦笑する。

「それじゃあ。」

声と共にポケットから一枚の白いハンカチを取り出し、片手を添えて1、2、3・・・とカウントすると、ハンカチが白い鳩となって飛び立ち、快斗の指先に戻ってくる。

『うわぁ・・・。』

蘭と青子が思わず声を上げ、コナンが目を見張る中で、快斗の指先にとまった鳩は、
またもう片方の手を添えられて3秒カウントするうちに一枚の白いハンカチへと戻った。

次にそのハンカチの真ん中を引っ張ると、切れ目も何もなかったはずなのに、

その中から色とりどりのミニチュアの万国国旗が飛び出す。

国旗を、新体操のリボンの要領で目の前でぐるっと一周させると、その国旗が全て日本のものとなっている。

くしゃ、と丸めてぽーんと放り投げるとまた1羽の鳩と化し、手に戻ったときにはまた1枚の白いハンカチとなっていた。

快斗の手元には、白いハンカチが2枚。

それをまたくしゃ、と一つに丸めると、
いつのまにか快斗の手の中にハンカチは一枚もあらず、

「ポケットを見てみな。」

という快斗の声で青子と蘭がそれぞれのスカートのポケットを探ると、

ハンカチが1枚ずつ出てきた。

「ま、こんなもんだな。」

驚きに目を見張る2人を見ながら、

軽く肩をすくめてみせる快斗を、コナンはじっと見つめていた。

快斗に出会ってからずっと感じる違和感。

何故か、ずっと前から知っているような・・・

そんな分けないと知りつつ、どうもその違和感は消えない。

むしろマジックを見たことでよけいに強くなったような気がする。

何なんだ、これは・・・くそっ、後ちよつとで出かかっているのに・

訳の分からないもやもやしたもの、コナンはしばらく頭を悩ませることになる。

だいぶ日も暮れてきて。

あと少しで一通り船をざっと歩き回り終わるところで、

快斗が急に眠気を訴えた。

「んゝ。なんだか知らねえけどすっげえ眠い。ちょっと部屋の中で寝てくる。」

「ええ？ んじゃあ、6時半からの夕食パーティには遅れないように来てよ！」

「わあったわあった。目覚ましセットしとくから大丈夫だって。んじゃ、おやすみ。」

「んもう！ 快斗ったら！」

と、とつと自室に引っ込んでしまった快斗の部屋の前で、3人はしばらく所在なげにつっ立っていた。

隣室

眠いといって引っ込んだ快斗の部屋のナンバープレートを見て蘭が声を上げる。

その隣に立つコナンの手には、一本の缶ジュースが握られている。先ほど、『のど乾いた』と言って蘭に買って貰ったものだ。

「ねえ、快斗君の部屋って101？」

「うん。そうだよ。青子は102。それがどうかしたの？」

「あのね、私達、103なのよ。だから青子ちゃんとこの隣。」

「そうだったんだ〜！」

きゃいきゃいと廊下で立ち話をするうちに、104のドアが開く。出てきたのは背の高い、ウェーブした茶髪の美人。

「あ……。」

「どうしたの、蘭ちゃん？」

驚いたような声を上げた蘭を、不思議そうに青子とコナンが覗き込む。

「いや、あの人……あ、あの！」

前半は呟くように、後半は大きな声で女の人に話しかける。当然その人は歩みを止めて、不思議そうに蘭の方を見た。

「もしかして……、有家雅美さんじゃないですか？」

「知ってるの？私のこと？」

「はい！私の友人が貴女のファンなんです。」

「あら、ありがとう。」

にっこりと笑顔で言葉を交わす蘭のスカートの裾をちょんちょん、とひっぱり、

「誰？」

「有名な女優さんよ。あんまり人望は良くないけど、演技は凄いの。」

「へえ……。」

小さな声で問うコナンに同じく小さく答える蘭。

しばらくとりとめのない世間話が続く。

そして、パツッと104の扉が開き、細面の男が出てきた。

短めの黒髪を七三になでつけた、どこにでもあるような極普通の会社員、といった感じだ。

強いて言えば、足下すれすれの裾の長いコートが特徴といえば特徴だろうか。

とたんに雅美の視線がきつくなる。

「勝夫さん！！6時に夕食が食べたいって言ったでしょう！？」

「す、すみません。用意に手間取ってしまって……」

「用意！？そんなたいそうな物があるのかしら？」

「え、えっと、あの……」

「……ふんっ。もういいわ。行きましょう。」

それじゃあ、そのお友達によろしくね。」

「あ、は、はい！」

鼻を鳴らした後、にっこりと蘭に微笑んだ雅美に、慌てて返事をする。

雅美は軽く手を振ると、勝夫と呼ばれた男を連れて食堂へと歩いていった。

「わっ!？」

「っ!？」

絨毯に足を取られてつんのめった勝夫がコナンに倒れ込む。

「あ、あたた・・・。」

「ご、ごめんな、坊や。」

「う、うん、大丈夫・・・。あ・・・。」

顔を上げたコナンの目がある一点でとまる。

そこには勝夫のコートにこぼれたジュース。

「ご、ごめんなさい・・・!」

「ああ、いや、坊やが気にする事じゃないよ。

洗えばちゃんと落ちるから。」

「本当にごめんなさい・・・!」

コナンと一緒に頭を下げる蘭に勝夫は苦笑すると、
いいって、と告げた。

ふと、コナンが床に落ちている物に気付く。

おそらく、ぶつかった時に勝夫のポケットからぼろりと落ちた物だろう。

「おじさん！これ、落としたみたいよ！」

「あ、ああ、ありがとう、ぼうや。」

コナンがすぐに拾い上げて渡す。

ふと、コナンは拾い上げた物に目を当てて、

「あれ、おじさんタバコ吸うの？」

「ああ。あんまり好きじゃないんだけど、これだけは好きなんだよ。」

「ふうん……。」

この匂い……オリエント種か……？

かがんだ勝夫の、床にべったりとついた長コートから漂う独特の芳香に、

コナンは思わず目を瞬かせた。

と、前を歩いていた雅美が振り返る。

「勝夫さん！早くしてって言うているでしょう！？」

「あ、はい！今行きます！それじゃあね、ぼうや。」

「うんっ！」

凄くキツイ目で勝夫を睨む雅美に、

勝夫は慌てて走っていった。

あー、なんつか。

知り合いと他人とで見事な化けっぷりだな。

ややぼーぜんとした目で2人を見送ってから、
コナンは慌てて蘭に、

「ね、ねえ。今の人は？」

聞かれた蘭は少し眉をひそめて、

「えっと、確か、雅美さんといこの前婚約した飯田勝夫って人だったと思う。」

少し気が弱いけど、有名会社の出世組で、頭が凄くいいんだって。」

「婚約……」

「雅美さんのお尻にひかれてそうだね。」

なんて物好きかな。とか、

よりもよってなんであんなカップルが成立したんだ？とか、
やっぱり親同士、会社同士の都合だろうか。とか、
いや実際にはつきりきっぱり尻にひかれてるだろ、とか。

色々言いたいことはあったのだが、とりあえずコナンは沈黙を保った。

と、青子がふと自分の腕時計を見て声を上げる。

「って、蘭ちゃん、もう6時近くになってる。」

「道理で。そろそろお腹すいてきたと思ったのよ。」

「それじゃあ食堂行こうよ！」

「あ、ちよっと待ってね。」

今すぐにでも歩き出そうとしたコナンに待ったをかけると、

蘭は自室のドアにいき、

「お父さーん！いないのー？」

声をかけてから、

「いないみたい。それじゃあ行こうか。」

「あ、えと、ごめんちよつと。」

にっこり笑った蘭に青子は慌てて言うど、

こちらは先ほど快斗が消えていったドアに行き、

最初はコンコンと、最後はどんどんと十数回ノックしてから、

「寝てるみたい。とりあえず快斗の携帯に連絡のメールを入れて、と。」

あまりのノックの激しさに思わずぎょつとした2人を尻目にけろんとした顔で戻ってくると、素早くメールを送信する。

「それじゃあ行こっか！」

にっこりと明るい笑顔の青子に促されて、

3人は談笑しながら食堂へと向かった。

食堂

「ナースハツハツハ！ いやあ、照れるもんですなあ。」

「まあまあ毛利さんもう一杯いかがですか？」

「おっ！ こりゃいいねえ貰いましょうか！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

食堂の一角。

すっかりできあがっている小五郎と、隣に一人の男。

もう隣にいる美人の肩を持つ小五郎注がれる冷ややかな視線。

蘭の無言の圧力に、

コナンと青子は思わず一步後ろに引いた。

「お父さん・・・・？」

低く低く響いた声に、小五郎の肩がピクツつと動き・・・

「ら、蘭・・・・？」

おそるおそるといった様子の声に、

無言の蘭が近づく。

ゆっくりと降ろされる小五郎の手。

こ・・・・こえーっ

あまりの迫力に、顔を引きつらせながら見守るコナン。

小五郎の目の前に来て、蘭の足がピタッと止まる。

「お父さん・・・私の言いたいことは、分かるわよね・・・？」
「はい・・・。」

地を這う声に小さな返事。

どっちが親だか分からないその様子は、
見慣れているものには見慣れすぎている光景だが、
見たことのない者には異様なものだろう。

小五郎と同席していた男女も青子も目を丸くしている。

ハハハ・・・

なんとなく、乾いた笑いを漏らしたくなったコナンだった。

「あれ・・・？」

「どうしたの、青子ちゃん？」

気を取り直して、

小五郎と同席していた2人を紹介して貰った。

聞くと、男性は神奈川県警の井ノ元刑事で、

女性は彼の奥さんだったらしい。

そして、小五郎の隣に着いた3人を含めた合計6人で談笑している
途中、

ふと青子が上げた声に蘭とコナンが反応した。

それに応えて青子が小さく指を指す。

「さっきの人・・・、お手洗いでも行ってたのかな？」
『え?』

見てみると、ちょうど扉から入ってきた飯田勝夫と目が合う。
しかし、彼の周囲に有家雅美の姿はなかった。
蘭達を見た勝夫がこっちに近寄ってくる。
と、おずおずとした調子で話しかけてきた。

「あの・・・、雅美さん知りませんか？」

「え?」

「雅美さん、ですか?」

「どうしたの?」

問いかける青子、蘭、コナンに、

「ああいえ、先ほどお手洗いに出かけられたんですが・・・。
でも、知らないならいいです。」

おずおずと笑うと、彼は雅美を探しに行ったのか、
辺りを見回しながら離れていった。

「どうしたんだろうねー。雅美さん。」

「そうね。さっき部屋を出て行ってからだいぶたってるもの。」

現在の時刻は6..20分。

別れてから既に30分ほどたっている。

心配そうな声を上げる2人を横目で見ながら、
コナンは勝夫が人混みに消えていった辺りをじっと見つめていた。

どうにもひっかかるんだよねー・・・。
さっき、何か引つかかると思ってたんだけど・・・。
ったくすぐどっかいってたから忘れちゃったじゃねえか。
えっと、なんだったけ・・・？

微かな違和感は、消えることがなかった。

6..30分。

「あれー？快斗、どうしたのかなあ？もうパーティーが始まっちゃうよ。」

時計を見て青子が声を上げる。

「ほんとだね。どうしたのかな？」

「寝坊したんじゃないの？」

「うーん。快斗、ああ見えて時間に結構きっちりな方だから、あんまり寝坊したのは見たことないんだけどなあ・・・。」
「そうなんだー。」

コナンに答える青子に、感嘆したような声を出す。

と、その時扉が開くと、

慌てた様子の快斗が飛び込んできた。

こちらに目をとめると、

ほっとしたような顔で走り寄ってくる。

「遅いよ、快斗！」

「わりいわりい。なんか寝坊しちゃって。」

『へえ。』

膨れた顔を見せた青子に、椅子に腰掛けながら手を合わせて謝る快斗。

寝坊、の言葉に思わず青子と蘭は顔を見合わせた。

「?どうしたんだよ？」

「ああ、いやあのね。」

さっき快斗君が遅れてるなー、って話してたときに、コナン君が寝坊じゃないの?って言ったのよ。」

「青子は違うって言ったんだけど、コナン君が正解だったねー。」

「ねー。」

顔を見合わせて笑う女2人組に、ややバツが悪そうに快斗は頭を掻いた。

そんな快斗に青子は笑いを消さないまま、

「それにしても、快斗が寝坊なんて珍しいね。」

「あ、いやあ、なんか異常に眠くてさ。」

疲れてたのかなー、俺。」

目覚ましが鳴っても意識が戻らないほど熟睡したのなんてすげえ久しぶりだよなー。

などと言いながら快斗は苦笑した。

その時、ふっ、と会場の電気が一斉に落とされた。

食事

「紳士淑女の皆様！」

本日はこの、ネレウス号にご乗車頂き、まことにありがとうございます！」

朗々とした声と共にスポットライトが主催者であろう人物に当てられる。

その後くどくどと船の説明や、招待された中でも特に大物の人物の紹介などが行われ、20分後。ようやく夕食となったのだった。

「ふいー。さっすが豪華客船。飯がうめーよなあ。」

「もう、快斗ったら！そんなにガツガツしない！」

それにフォークとナイフに別々の物のつけないの！お行儀悪いでしょ！？」

「いいじゃねーかよっ！腹へってんだからさ！」

「よくないっ！そういうのは癖になるんだよ！？」

後で直そうとしても遅いんだから！」

「お前は俺のお袋かよっ！？」

「失礼ねっ！青子はそんなに年取ってないわよっ！！」

「そーゆー意味じゃねえよ！」

「じゃあどういう意味なのよ！！」

とぎれることのない2人の漫才に、周りの人間はもはや苦笑するば

かりだ。

そんな周囲にはたと気がついて、
微妙に気まずそうに互いをちらちらと伺いつつ、
食事をちょんちょんとつつきながら沈黙する2人。

その仕草もタイミングもぴったりとそろっていて、
それがさらに失笑を買うこととなっているのだが。

P・M・7:20。

「あ、あのー。」

『ん?』

「おや、またあなたですか?」

「あ、はい・・・。」

不意に背後から聞こえたひ弱な声に声を上げる皆の中、
小五郎に問われた飯田勝夫はあいまいな返事をした。
先ほど着ていたロングコートは腕にかけている。

「あ、あの、雅美、まだ入ってませんか?

パーティ会場にもいないし・・・。」

「え? 見てませんよ?」

「もしかしたら部屋にいらっしやるんじゃないですか?」

「ほら。ここ寒いし。上着を取りに帰ったのかもね。」

「え、ああ、そうかなあ・・・。」

蘭、青子、コナンの言葉に気弱に答える勝夫に、
井ノ元刑事ががたりと席を立ち、

「それだったら見に行けばいいじゃないですか。部屋は何処です？」

「え、104、ですけど。ってあの、ちょっと!？」

「まあまあ。いいじゃないですか。」

勝夫の答えに従って皆でぞろぞろと向かうのを見とがめた勝夫をなだめる小五郎。

蘭や快斗達は小五郎にここにいるように言われたのだが、『もう食べ終わったし、あそこにも仕方ないし。』と言ってついていったのだった。

結局、

先ほど談笑していた小五郎、井ノ元刑事とその奥さん、コナン、蘭、青子、快斗の7人と勝夫の合計8人で、ぞろぞろと雅美の部屋へと向かうことと相成ったのだった。

行く道がすら、快斗がこっそりと青子に聞く。

「で、104の雅美って誰だよ？」

「快斗君知らないの？あの有名女優、有家雅美さんなの。」

「そんでもって勝夫さんは雅美さんの婚約者なのっ。」

「っげええええっ!？有家雅美い!？」

突然大声を上げた快斗に一斉に視線が向かう。

「ん?どうしたのかね黒羽君。」

「あ、いやいやなんでもないです。

あの有名女優さんが近くの部屋だって言うから、
ちょっとびっくりしただけですいやもうほんとに。

だから気にしないで下さいお願いしますからっ!!」

皆を代表した井ノ元刑事に早口で告げる快斗。

はっきり言ってその口調は『ちょっとびっくりしただけ』には聞こえないが、

深く尋ねることも戸惑われたのか、

井ノ元刑事は再び歩き出した。

「どうしたのよ、快斗？」

「いや本っ当に何でもねえよ。

・・・はあ。それにしても、有家、雅美ねえ・・・。」

青子が聞いても答えてくれないので諦めたらしい。

蘭も青子も再び前を向く。

引きつり笑いを浮かべる快斗を、

コナンはちらっと窺うと興味なさそうに前を向いた。

何があんのかしらねーが、そーとー嫌ってるな。あれは。

先ほど快斗の目に走った強烈な嫌悪感。

それは一瞬で覆い隠されたが、あの、

人を無条件に信頼しまくっているような陽気な快斗があそこまで嫌っているのだ。

何か理由があるのだろう。

もっとも。

と、思考を巡らせる。

『陽気で明るく無邪気な黒羽快斗』が作られた仮面でなければ、の話だな。

ま、どっちにしろ俺にはかんけーねーや。

投げやりなことを考えると、コナンは一行についていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956a/>

邂逅

2010年10月20日19時29分発行